
獏と溜息と小言と

竹村 円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獏と溜息と小言と

【Nコード】

N6953J

【作者名】

竹村 円

【あらすじ】

夢を見る。

楽しい夢。

悲しい夢。

覚え無い夢。

夢を覗きます。

夢の中の当人にとって夢は現実で、日常。

不定期更新です。

1：夢（前書き）

初投稿です。

文才はありませんが、皆さんに触発されて書いてみました。

お気に入り小説の更新を待つ合間に読んでいただけたら幸いです。

1：夢

——夢を見た。

小さな可愛らしい少女が僕の隣りを歩く。

霧の中をとてもしそうに手を繋いで歩く。

「ねえ、お父さん」

…お父さん？

僕に娘はいない筈だけど…。

でも、お父さんと呼ばれて何故か悪い気はしなかった。

寧ろ…嬉しい？幸せ？

そんな気分にさせられた。

「…お父さん？」

不思議そうに顔を傾げる少女。…ああ、これって所謂『愛』っていうものなのかな…？

よく分からないけど、なんだかそんな気がする。

だから世のパパたちは、娘にカレシができればブチ切れ、嫁ごうものなら咽び泣く。

今ならそんなパパたちの気持ちができる気がする。

…っと、余計な事を考えている場合じゃない。
それより、ここは何処なんだろうか。

何処かの田舎の農道のようにけど、地元にはこんは景色は見掛けなかった気がする。

そんなことを考えていると次第に霧が深くなり、少女の笑顔すらも見えなくなってしまった。

そして、視界が小さくなると同時に少女の声も遠くなっていき、最後には自分の意識も沈んでしまった。

1：夢（後書き）

見切り発車でプロットすら無いです。

すべて思いつきで書くので、前後の整合性がとれていなかった場合はご容赦ください。

2：日常（前書き）

早速二話です。

2：日常

…… prrr!!!

「……夢？」

携帯電話の音で現実に引き戻される。
時間は午前11時07分。

「………あ…バイト！」

既に07分の遅刻。
電話の相手を確認すると案の定バイト先からだった。

「…あ！^{シキミ}密です！申し訳ありません！！」

『…いや、珍しいね。何かあったの？』

「いえ、寝坊です！すぐ行きます！」

『ん、事故には気を付けて。あと、遅刻分はきちり残業してもら
うからね』

「はい、直ぐに向かいます！失礼します！」

電話を切ると急いで着替えて鞆を肩に掛ける。

財布と携帯電話はパンツのポケットに突っ込み、寝癖が付いた髪は

帽子で誤魔化する。

「行つてきます!」

玄関で靴をはきながら誰もいない部屋に声を掛ける。

一人暮らしを始めても中々抜けない癖。

声は返つてこないけど気にしない。

急いで部屋を出て、扉を閉める。

ただ、今日は何時もと違い、扉が閉まりきる直前に声が聞こえた気がした。

いつてらっしゃい

「お疲れ様です」

遅刻分の時間を含めたバイトを無事終えて荷物をまとめていると、店長に後で事務所に来るように呼び出されたので事務所に向かう。

呼び出しの理由は勿論今日の遅刻についてだろう。

事務所の扉をノックする。

「失礼します」

扉を開けると、事務所のテーブルで煙草を吸っている店長が居た。

店長は特別怒っているようには見えない。

「お、密君か。今日もお疲れ様。まあ座つてよ」

店長は座るように促し、座ると話を切り出す。

「で、どうしたの？何時も20分前行動の君が寝坊で遅刻なんて」

珍しそうに尋ねる。

「はい、今日は申し訳ありませんでした」

「まあいいさ。遅刻分は残業してもらったし。今日のところはイーブンって事で。でも次からは気を付けてね」

店長は苦笑しながらも思い付いたように続ける。

「…あ！もしかしてアレか!？」

そう言つと店長は右手の小指を立てた。

「い、いえ…違いますよ…？てか古いですね、小指たてるの」

ただ、カノジヨではなく少女だったという違い。しかも夢。

「アレ？違つなの？」

「どこからカノジヨって出てくるんですか!？」

「いやあ、俺が学生の際には大体女絡みで遅刻してたからさあ」

笑いながら答える店長。

内容によつては、下手したら刺されかねない事を笑い話で済ませるのが恐ろしい。

遅刻にもあまり怒らなかつたのもこの言葉によるものだろう。
むしろ『経験者は語る』というものに近いようにみえる。

「じゃつ、話はこれだけだから！早くカノジヨの所行つてあげなよ
」

「だからカノジヨなんていませんってば！…失礼しました」

事務所を出て、他のスタッフとも挨拶をして店を出る。

空を見上げて煙草を吸う。

夕焼け空が眩しい。

溜め息をつきながら煙を吐き出す。

「今日は早く寝よう」

2：日常（後書き）

この作品はジャンル分けをファンタジーとしていますが、日常がメインの話となっています。

3：狼男（前書き）

スタートダッシュだけは調子いいです。

この小説は行き当たりばったりで構成されています。

3：狼男

——夢を見た。

黒い雲が空を覆い、月明かりも弱い森の中。近くに見えるのは神社か寺か。

そこには、二足で立ち上がり何々と語る狼男のような影がいた。対して僕は大木の根元に腰を下ろしている。

丁度、狼男と向かい合うように、狼男を見上げるように。

傍らには縄と、白の半紙で作られた菱形が繋がったような紙が…ああここは神社なのかもしれない。

しばらくすると狼男が肩を震わせて笑いながら喋り出す。

「はっ！どうにも出来ねえだろ！」

何が出来ないんだろうか。

「情けねえなあ！」

何が情けないんだろうか。

「哀れだなあ！」

そんなに僕は哀れに見えるのだろうか。

「ははっ！　　がなけりやその体たらくかあ！」

？…、言葉にノイズが走り聞き取れない部分があった。

「大体、手前えに力なんて無えだろお！」

腕っ節なんて元から無い。それは自信を持って言える。

「阿呆だな！鎮められず、内に取り込むたあとんだ阿呆だ！」

ん？何の話だろうか。

「どれだけ手前えの実力を過大評価してんだよっ！」

僕と狼男は話が食い違っている。それだけは分かる…気がする。

「尤もお、ガキを逃がす為に、隠す為にそうしたってえ事だからなあ！」

ガキ？逃がす為？隠す？

「しくじったぜえ！」

さっぱりだ。訳が分からない。でも…。

「さあ教えろお！ガキの居場所を！」

でも…。

「最早恐れるのはあのガキのみだあ！」

逃げ延びてほしい。

「あと一歩だあ！」

逃げ延びてくれ――

神楽っ！

3：狼男（後書き）

続きどうしましょう…。

4：一周（前書き）

ペースいいです。

話の展開が遅くて申し訳ありません。

4：一周

……ピンポーン。

「……………夢？」

ピンポーン。

「……………誰だろ？」

珍しい。誰かが来たようだ。

交友関係が限り無く狭いのに訪ねてくる奇特な人は誰だろうか。

ベッドから起きようとすると、不意に服が引っ張られる。

「ん？」

そちらを見やると…。

夢で出てきた少女が横で寝ていた。

「ん！」

「おーい！起きろお！講義遅刻するぞお！」

ピンポンピンポンピンピンピンポピンポーン！

ヒヤッホオオッ！

これがピンポンダッシュならぬピンポンピンポンだああ！！

しばらくインターホンで遊んでいると、ゆっくりとドアが開く。

「お、おはよう…、京」

気まずそうに襖がドアから顔を出す。

「あ？どうした？気まずそうな顔して？」

「…そんな事無いよ」

なんていうか悪いことが見付かった小悪党のような白々しい態度。

はっ！この空気はっ！！

「……まさかつ！女かああ！！」

「……」

柊はこれでもかという位に驚いた顔をする。
当たりですか…。

「まさか、これからイチャイチャラブラブするつもりだったのか！
」

叫ぶと柊の目がこれでもかという位に泳ぎだした。

バレバレだなあ…。少しは隠す優しさを見せてくれよ。

俺、今カノジヨ居ないんだぜ？

……つて、誰だよお前の後ろに隠れてこちらを窺う少女は？

「…おい、柊君や？そちらのお嬢様は何方だい？」

「えゝ！？…あー…、うん……………」

勿体ぶるのかコイツは！

てか、とんでもなく齒切れが悪いな。

「…で、誰？」

「…何時の間にか隣で寝てた」

俺は柊から言われた言葉に驚いた。

いや、驚きを一周したね。

さらにもう一周して溜め息も一緒に出たさ。

とりあえず全力でリアクションを返してやった。

「はあああつつ！……！」

4：一周（後書き）

今書いてる話の結末は見えないのに新しい話のネタを思いつきました。

ワガママな脳味噌です。

5：冤罪（前書き）

基本は一話、一人の視点のみで語ります。
なので内容も短くなりがちです。

例外はあります。

三人称を書く力はありません！

5：冤罪

「いやあ、妹の服が着られて良かったよ」

サイズが少し心配だったけど、と笑っているのは僕の限り無く狭い交友関係の内の一人、境田京。サカイタ ミヤコ

こんな名前だけど一応男だ。

今風の服装、緩いパーマの髪型に優しげな顔立ち。

所謂イケメン。

本人は自称『草食系男子』と言うが、僕にはとてもじゃないがそうは見えない。

どこの草食系が居酒屋で女性だけのグループに自然に話し掛けられるんだという話だ。

ちなみに九歳の妹がいる。

「アリガトウゴザイマス」

夢で会っただけの、隣で寝ていた見知らぬ少女Aに服を着せる京に声を掛ける。

少女Aは着ていた服以外何も荷物を所持してなかった。

京が一旦帰宅し、妹の服を数着持ってきてくれたのだ。

部屋の隅で三角座りをしてボーっと二人を見ていた僕に、少女Aに対しては終始笑顔だった京が無表情でこちらに振り向く。

「…で、弁明は？」

「…ば、僕は無実です」

「ド変態」

「…え？」

「淫行罪」

「え？」

「未成年者略取」

「……」

「……ロリコン？」

とどめの一言。

「ち、違うよ！ホントに違うんだ！！」

「熟専？」

「そっちじゃねーよ！！」

そこは全力で否定させてもらう。

「まあ気にすんなよ。ただの茶目っ気だ」

京は笑いながら答えた。

冗談に聞こえないから質が悪い。

「密、冗談は置いといて……マジでどうすんの？」

どうすんの？とは少女の扱いについてだろう。

「どうすんの？……って警察位しか——」

そう言う少女Aはびくりと肩を震わせて、京の腕に抱きついてしまった。

「あ、嫌われちゃったかな？」
少し心配になる。

「いや、違うと思うぞ。…きっと警察ってワードが引っかったんだと思う」

さすが妹がいるだけのことはある。子どもの機微に詳しい。こじつけだけど。

すると、京は何か考えるような素振りを見せると、少女Aの頭を撫でて優しく声をかける。

「俺の名前は境田京。ねえ、君の名前を俺に教えてくれるかな？」

「……」

沈黙。

「恥ずかしいのかな？お兄ちゃんにお名前教えてくれないの？」

再挑戦。僕だったら一度無視されただけで心が折れてるよ。

「……」

再び沈黙。

なんだか京が可哀想だ。

「なんなら俺の事はミーちゃんって呼んでくれ」

「……」

三度沈黙。

京の甲斐甲斐しさに涙が出てくる。

しかし、京を受け入れたのか小さく頷く。

「で、あつちで三角座りしてる変態が密。シーちゃんって呼んであげてね」

反応を貰えたのが嬉しかったのか嬉々として僕を指差す。

「……」

首肯。

「え？なんだか僕に対する扱いが酷くないかい？」

「いや、十分だろ。このロリコ——」

「まだ言うかつ！」

即座に否定。

何とかして一矢報いたい。

「とかなんとか言って京もその気があるんじゃないの？」

きた！僕の会心の一撃！

「はン！密には俺の慈しみの心が理解出来んのか？そんなだからモテないんだぜ」

京の痛恨の一撃。

僕の心にヒビがっ…！

「…っ！……だけど肝心な名前は聞き出せてないじゃないか？どうするんだい？」

重箱の隅をつつくように詰問する。

すると、京は周りを見回すとテーブルの上のペンを取り、カバンからルーズリーフを取り出して少女Aに手渡した。

少女、オロオロ。

「さあ俺たちに名前を覚えてくれないかな？」

京がそう言うつと意図を理解したのか、少女Aは紙に名前を書く。

「へえ、神楽ちゃんっていうのか。可愛い名前だね」

京は満足そうに少女A改め、神楽ちゃんに笑いかける。
神楽ちゃん嬉しそうにはにかんでいる。

「あ、やっぱりその名前なんだ？」

ぼろつと零してしまった。

すると、京はもの凄い早さで僕を睨み付けて、

「名前、知ってたのか？」

こう尋ねてきた。

怖い怖い！京さん超怖いですよ！

取りあえず頷く。

「俺の努力って一体……」

京はそう言いつつ、うなだれてしまった。

…なんかゴメン、京。

京の落胆っぷりに神楽ちゃんも慰めるように京の肩を叩いていた。

5：冤罪（後書き）

早く魔法的な何かを出したいです。

6：告白（前書き）

毎度の事です。が短いです。

6：告白

「…で、何で名前知ってたのさ？もう聞いてたとか？」

Bランチを食べながら聞いてくる京。

神楽ちゃんには部屋で留守番をしてもらい、僕たちは学校に来て、講義を終えてから学食で食事をしている。

部屋を出るときも神楽ちゃんが僕たちにくつついてきて、行かせまいとしていたけど心を鬼にして留守番を頼んだのだ。

僕は手、京は服を掴まれた。

ぐずり方が可愛かった。

……………他意はない。

「いや…なんて言えばいいのかわからない」

「身につけてたものに名前が書いてあったか？」

連続で見た夢で……なんて言ったら、京に心の病院を紹介されるかもしれない。

「…あ、ああ。実はそうなんだよ」

「へえ」

京は興味無さそうに応える。

「…で、本当はどうなんだよ？」

誤魔化せてなかった。

「え？」

「え？…じゃなくて、本当の事話せよ」

溜め息をつき、言葉を続ける京。

「いや、今更だろ？考えてみろよ。カノジヨとイチャラブかと思えば、出てきたのが年端もいかぬ少女。その手の趣味かと思えば、そうではない」

酷い言われようだ。

「熟専だし」

「違う！」

「……。まあ、これだけ色々出てきて、今更何を隠し立てする必要があるんだよ？」

確かにその通り。

微妙な沈黙は気になるけど。

「…そうだね。……笑わないでくれよ?」

「これから聞く事を笑ったら、俺は今日半日をとんでもないドッキリ企画に付き合わされていた事になるな」

「…めで……」

「…ん?悪い、周りが五月蠅くて聞こえなかった」

「だから……ゆ……」

「ん?」

「夢で会った」

京が床に箸を落とした。

6：告白（後書き）

マトモな構成力が欲しいです。

7：提案（前書き）

どの話も内容が薄いです。

7：提案

「いやあ、予想の遥か彼方をいく答えでお兄さん驚いちゃったよ?」

夢で名前を知った?

ファンタジーもいいところだな。

コイツにはメンタル的なケアをしてくれる病院を紹介してやるべきなのかもしれない…。

「そんな目で見ないでよ。……だから話したくなかったんだ」

気まずそうに視線を逸らす櫛。

「スマン。…頭冷やすついでに落とした箸を代えてくる」

俺も気まずい。

箸を交換に行きつつ返答を考える。

以下、脳内会議。

「へー、そうなんだあ。凄いね!」

ムリ!不誠実すぎる。
不真面目すぎる。

「本気で言ってるの?いい病院を紹介しようか?」

世間一般の常識から鑑みて一番ベターな返答。
社会的には100点満点。
友人としてはアウト。

「それって凄いな!...夢かあ、そんな事もあるんだなっ!ある意味
正夢だ」

友を信じる俺、カッコイイ!!
しかし、友を信じつつ肝心な所は誤魔化す。
俺って超策士じゃね?

俺の脳内会議は満場一致での案を可決にした。

席に戻り、しっかりと密の顔を見る。

「もう一度、確認のために聞く。神楽ちゃんとは夢で一度会ってるんだな？」

「ああ……」

さあ、言つぞ。

「それって凄いな。…夢かあ、そんな事もあるんだな。ある意味正夢だ」

言つてやったぞ。
さあ密よ、俺を讃えろ！

「ああ。まさか正夢……夢で見ただけの女の子が隣りで寝てるとは思わなかったよ」

讚えられなかった。
でも、気にしない。

「だよなあ。普通は有り得ねえよ」

「…だよね」

気まずい空気。

密が凄く可哀想に見えてくる。

ここで空気の読める俺が話題転換！

「あ！そういえば、今日の夕飯どうするんだ？」

「普通に外食を…」

「待て。邪推かもしれないが、職質されたらどうする」

「ああ……」

密が『今知った』と言うような顔をする。
…考えてなかったのかよ。

「今の神楽ちゃん自体、密と神楽ちゃんの関係は色々とマズすぎる。
普通に歩いてりゃ何ともないが、いざ職質されたら…」

「確かに」

「後日警察に行くとしても、心証を悪くしないために今は警察との
下手なトラブルは避けたい」

「心証かあ……」

「まあ、かなりネガティブに考えた場合の話だけだな」

俺も関わってるし、身の安全は欲しい。
だから、安全な食事方法を提案をする。

「だから……三人で食べないか？ 密の部屋で」

7：提案（後書き）

一度の更新で長く書ける書き手さんはすごいですね。

羨ましい・・・。

8：変更（前書き）

話が進んでないのに8話です。

8：変更

京からの提案には驚いたな。

いつもなら『俺、今日サークルで飲み会あるから』とか言って食堂を出たら別れそうだったのに。

実際、飲み会という名の合コンがあったらしいけど、丁寧に断りの電話をしてたし。

しかも代役を立ててた。

僕と京の交友関係の広さに違いがありすぎる。

正直羨ましい。

学校の正門に向かう道すがら一応聞く。

「本当によかったの？合コン断って」

「気にするなよ。三人で飯食って、久しぶりに早く帰って妹とW I
Iで遊ぶさ」

……シスコ——ゲフンゲフン。あー…妹思いなんだね。

「何か変なこと思わなかったか？」

「ん？」

「顔にでてるぞ」

「……」

京には勝てないなあ…。

「…で、何食べる？」

「あからさまに話逸らしたな」

「気にしないで」

「気にしたら負けだと思うから気にしない。……まあ、神楽ちゃんはまだ小さいから薄味の和食でいいんでないか？」

「何故に薄味？そして和食？」

「小さい時は味覚が敏感だから、薄味で出汁の味とか和食に親しんだ方が大きくなったときに味覚が豊かになるんだよ」

「へえ、じゃあ肉じゃがで。あと冷凍庫に鰯があるから焼こうかな」

「渋いな」

「性分なもので」

互いに見合っつてニヤリと笑う。特に意味はない。

「——とお！おい櫛。アレ……」

二人でニヤニヤしてると京が何かに気付き指をさす。

その指の先を見ると……。

「っ！！か、神楽ちゃん！？」

正門に背を預けて立っている神楽ちゃんがいた。

神楽ちゃんはこちらに気付くと全速力で走って僕に飛びついてきた。

物凄い笑顔で。

「どっしって……にー!?」

神楽ちゃんは笑っている。

京はニヤニヤしている。

「留守番を頼んだはずだよ、神楽ちゃん？」

神楽ちゃんは俯く。

「アレだろ？ 櫛に会いに来たってところだろ？」

すると神楽ちゃんは『分かってるじゃねーかミーちゃん！』という勢いで京に親指を立てる。

京もサムズアップ

「櫛もさ、せっかく迎えに来てくれたんだから喜ばうぜ？ どうせ部屋に盗られて困る物は無いんだろ？」

「酷い言い様だね」

僕にだって盗られて困る物くらい……特に無いな、うん。

京はそんな僕の顔を見て『だろ?』と爽やかに笑いかけてきた。

京はその笑顔で何人の女性を弄んだか知らないけど、僕は騙されない。
いい。

僕、男だし。

「まあ、職質されても知らんが」

…
ですよ。

「あ、そう言えば夕飯はどつする?」

神楽ちゃんが外に出てきたので、先程まで話していた事が前提から覆された訳で…。

「せっかく来てくれたなら、夕飯は外食でいいんでないの？」

京はあっさりと先程の話を覆した。
思い切りがいいな。

「和食で外食……。俺？」

「夢。かあ。ん……。あ、そうだ！丁度いい。それなら俺がよく行く店にしないか？」

「そんな所あるの？」

てつきり京が行くところなんてファミレス・居酒屋・バー位かと思っただ。

「少し変わった場所にあるから結構穴場だぜ？味は保証する」

「へえ…、それじゃ行ってみようかな」

京の提案に従い、そのお店に向かうことにした。

8：変更（後書き）

次話で少し変化があるかもしれませんが。

9：淵瀬（前書き）

前話のあとがきが嘘になってしまいました。

9：淵瀬

「ここはどこですか？」

目の前にはどっしりした門構えの『いかにも通な人の御用達』という雰囲気のある店がある。

看板には『茶寮 淵瀬』と書いてある。

それを見て櫓は完全にビビってる。

「さて、行くぞ」

「無理！」

「気にするな」

「気になるし気にするよ！こんなお店行けるわけ無いよ！」

そんなビビる必要無えのに…。

「大丈夫！いけばわかるさ、コノヤロー！」

「余計心配になつてきたよ」

「さあ神楽ちゃん！いざ行かん！」

神楽ちゃんを呼び寄せ中庭を歩いていく。

密もビクビクしながら付いてきている。

なんていうか……不審者みたいだな。

庭を渡り、入口の扉を開けると着物を着た女性が待ち構えていた。

「いらっしゃ……て、ミーちゃんか。」

この女性とは顔馴染みだが名前は知らない。しかも勝手に俺のことをミーちゃん呼ばわり。

悪い人ではないので呼び方は改めさせていない。

「よっ！飯食いに来た」

「アレ？今日予約してた？」

「いや、してない」

「部屋空いてないよ？」

「カウンターの方で食べるから大丈夫」

「それなら、こっちの入口から入って来ないでよ」

「いやあ、二人のリアクションを見たくてさ。ついこっちから入ってたんだよ」

「なるほど。お兄さんなんて完全に萎縮してるじゃないさ。……いらっしやいませ。今日はお座敷にはご案内出来ませんが、どうぞお寛ぎくださいね」

俺に小言み言うと、二人に向かうと営業スマイルで話し掛けた。

なにこの扱いの差は。

密は会釈しつつ挨拶。

神楽ちゃんはしっかりとお辞儀。
とても礼儀正しい。親御さんはしっかりと躰みたいだな。

席へ移動するため廊下を歩いていると密が疑問を投げ掛けてきた。

「さっき、店員さんが『こっちの入口』って言ってたけど、どういうこと?」

「ああ、行けばわかるさ。あ、ここを右に曲がるぞ。左に行けばトイレがあるから」

右に曲がると少し開けた部屋に出た。

「へえ、こっちはカウンター専用のスペースなんだね」

「入口も専用があるんだぜ。こっちはその入口から入るんだ。」

アレだな。要は客層・客種を分けるような造りになっているんだ。

会席・接待には座敷。
軽く一杯にはカウンター。

だから店名は『淵瀬』

付き合い・集まりの深さの度合い。
深いと浅い。下らない暗喩だ。

「おい、クソガキ。さっさと座れ」

椅子に座ろうとすると、カウンターの奥からオッサンがでてきた。
一応ここの主人。

オッサンは不機嫌そうだがこれが普通の状態。

「よっ、オッサン。飯食いにきてやったぜ！」

「ふん、手前えが来るとウチの価値が落ちちまうぜ」

「違えねえや。」

「で、その二人が今日の連れかい？」

オッサンが二人の紹介を促してくる。

「ああ、密と神楽ちゃんだ。密は学校の同期生。神楽ちゃんは密のいとこだ」

神楽ちゃんについては誤魔化しておく。

「よく来たな。今日はゆっくりしていつてくれ」

オッサンは二人にニカツとわらう。

「よし、さつさと食べようぜ？オッサン適当に頼むよ」

9：淵瀬（後書き）

更新する度に思います。

長ったらしい。

10：幻視（前書き）

ようやく現実離れし始めました。

10：幻視

「京がこんなお店知ってるなんて思ってたよ」

「まあな。普通なら知っても行かねえけど、ここは特別だ」

僕は出された料理に手をつけながら京に言う。

京はビールを呑みながら答える。

ちなみに今はカウンターで、神楽ちゃんを中に左に僕、右に京が座っている。

味は言わずもがな。

「だよな。入りたくても入れないね。敷居高そうだし」

すると、『敷居高そう』に反応したのか、オッサン改め大将が僕に話し掛ける。

「兄ちゃん、そりゃあいけねえな。若いんだから色々体験せにゃ」

「そつだぞ。時には大胆になるべきだ」

京も尻馬に乗る。

「クソガキ、手前えの大胆さは別格だ。もっと慎ましさと節度を覚えろ」

そんな話で笑っていると神楽ちゃんが僕の服を軽く引く。

顔を向けると廊下の方を指差した。

……あ、トイレね。

「うん、いつてらっしゃい。場所は分かるね？」

神楽ちゃんは頷くと椅子を降りて廊下へ向かった。

「ん？神楽ちゃんはトイレか？」

京……デリカシー無いな。

「……そうだよ」

「……ふーん。それでオッサン、視てみてどうだった？」

ふと、変なことを言い出す京。

「ああ、兄ちゃんとお嬢ちゃんの線は繋がってるが、繋がりがおかしい」

大将も訳が分からない事を言う。

「クソガキ、ついでにもう一つ。オレに嘘の紹介しやがったな？」

「ああアレか。ゴメンゴメン」

京は笑いながら謝る。

これは分かる。神楽ちゃんをいこと紹介したことだね。

「まあいい。兄ちゃんとお嬢ちゃんの繋がりについてだ」

大將は溜息をつく。

「へえ。密と神楽ちゃんの繋がりはどうなだった？」

京は僕を見てニヤニヤしながら大將に聞く。どうせ『恋人』とかいう言葉を待ってるんだろう。

「……ありゃあ親子の繋がりだ」

「……………へ？」

あ、京が固まった。

「だから、親子だ。お・や・こ」

京は依然固まったままだ。
変わりに僕が続ける。

「親子ですか？」

「……兄ちゃん、責任とってるわけだな？」

「……………」

ええ〜？

「いやっ！変なこと言っ
て済まなかった！」

焦りながら取り繕う大将。

盛大な勘違いをしてらっしゃる。

「全く身に覚えのない事なんです
が、何故親子と？」

「それは俺から言う！」

あ、京が復活した。

「オッサンは見えるんだ。

所謂

『対象の人との繋がり』

を」

京はしたり顔で僕を見つめる。

「こらクソガキツ！手前え、何したり顔で自分の事のように答えてんだよ！」

大将が良いところを盗られ憤慨する。

京と大将のコントはともかく、大将の特技？力？も普通は笑い話と捉えるけど、今なら疑うことなく信じられる。

何故なら……、

「ねえ、京？」

「ん？どした、神妙な顔して」

「僕の夢についての事で、まだ話してないことがあるんだ」

「……………何だよ？」

「大将の……………いや、この場合は僕の答え合わせかな。……………夢で神楽ちゃんに合ったって言ったでしょ？アレの関係なんだけど」

「夢……………」

「そう、夢の中での話なんだけど……………神楽ちゃんに『お父さん』って呼ばれてた」

僕が答えを知っていたから。

10：幻視（後書き）

今更ですが感想・批評をいただけたら嬉しいです。

11：黒霧（前書き）

前話を更新した後、既に感想が書き込まれていたのに気付きました。
ありがとうございます。

こんな話でも読んでくださる方がいる事に感謝します。

11：黒霧

「やっぱり、責任取ってた訳だな？」

オッサン！今、それ言う空気じゃねえだろ！

てか最早俺の常識の範疇をブツ飛んでる。

「……身に覚えは無いけど、どうやらそうなるみたい」

真面目に応えた密を見ていたオッサンは気まずそうに目を逸らした。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

何分程沈黙が続いただろうか。オッサンが沈黙をやぶった。

「親子云々の件はもういい。……一つ気になる繋がりがある」

気になる繋がり？

「なんだ、それ？」

「……」

密は黙ったままだが、オッサンをしっかと思据えている。

「クソガキには前に話したことあるよな？オレが見る繋がりは無数にあるって。」

オッサンは視線を俺に向けて尋ねる。

「ああ。『繋がりとは人との結び付きの糸。生きていれば繋がりは無数に作られ、無数に切断されていく』…だったか？」

以前、話されたことをテキストに思い出す。

「概ね正解だ。だがよ、お嬢ちゃんには繋がりの糸がほぼ皆無なんだよ」

「皆無……ですか？」

密はオウム返しをする。

何だかんだで心の許容量を大きく超えてしまっているようだ。

「なあオッサン。それってかなりおかしい事じゃないか？」

つまり、繋がりが無い＝人との接点が皆無ってことだ。

友達との繋がりが無い。

親族との繋がりが無い。

ふらりと立ち寄ったコンビニの店員との繋がりすら無い。

さすがにコンビニの店員との繋がりは直ぐに切れるが。

それを差し引いても、とんでもなく異常だ。

「はつきり言おう。お嬢ちゃんは異常だ」

オッサンは冷徹に言い放った。

密は顔を顰める。

「だが、それ以上に気になる繋がりがある」

「あ？オッサン、繋がりには皆無なんじゃねえのか？」

「バカタレ、『ほぼ皆無』って言ったろおに」

バカって言われた、バカって。
俺泣いちゃうよ？

「お嬢ちゃんには、兄ちゃんは勿論、クソガキ、オレとの繋がりだ
つてある」

ま、当然だな。

「問題はそこもあるが本題は別だ」

「……………なんですか？」

おや？久しぶりに密が喋った。

まあ！立った！ク。ラが立ったわ！

まあ！喋った！密が喋ったわ！

……………じゃなくて。

「変な繋がりがある」

「ん？変って何が？」

「黒くて、変な霧みたいなものが零れてるんだよ」

「霧……………ですか？」

霧って言われてもピンとこないな。

「それはなんですか？」

「……済まねえ、兄ちゃん。オレが分かるのはこれまでだ」

「……そうですか。ありがとうございます」

密がオッサンに頭を下げた。

「いってことよ。あんま役に立てなくてスマンな」

「いえ、大変参考になりました」

オッサンは俺たちに『まあ氣い付けな』とだけ言つとカウンターの奥に引っ込んで行った。

「いい話聞けたろ？俺のお陰だ」

「京は大したことしてないでしょ？」

まったく、俺が密とオッサンを引き合わせてやったってのに。

この恩知らずめ。

「……でも、ありがとう。京」

そう言うと、俺に笑いかけてきた。

うん、撤回する。恩知らずって思ったこと。

ちなみに。

神楽ちゃんがトイレから全然戻ってこないから様子を見に行った。

従業員休憩室で従業員の皆に遊ばれていた。

11：黒霧（後書き）

次話、漸くです。

12：帰路（前書き）

朝から更新です。

12：帰路

「京はさ、元から僕を大将に会わせるつもりだったの？」

『淵瀬』を出た後、夜道を歩きながら京に尋ねる。

「いや、そんなつもりは無かったなあ…。タイミング良かったから成り行きで」

「そうなんだ…」

「でも、聞いて良かっただろ？」

「まあね。良くも悪くも神楽ちゃんと僕に関係する情報は手に入ってたよ」

でも、余計な情報ばかりで困るし、第一頭が付いて来ない。

頭がパンクしそうだ。

「ところで、何で大将と知り合ったの？」

他愛のない話を振って思考を誤魔化する。

「ああ…、行き倒れてたら拾われた」

嘘だ。物凄くニヤニヤしてる。

「普通笑いながら言う？」「嘘です」って言ってるようなものじゃないか」

「どうだか」

京はさらっと流す。

どうせデートで使ったことがあるだけなんだろうな。
交友関係広ければ情報もより多く入ってくる。
その中で大将とも知り合ったのだろう。

「まあ、オッサンのアレはかなり怪しいし疑わしいけど、本物だ。信じる信じないはお前次第だけだな」

「今更疑う気はないよ」

溜息をつきながら京を見る。

京……。彼は一体どれだけ広い交友関係の持ち主なんだろう。

毎日どこかへ出掛けてるみたいだし、『淵瀬』の大将みたいな普段の生活では交流の無いような人とも親しい。
神楽ちゃんも笑いながら受け入れた。

適応能力が半端じゃない。

黙り込んでいると、話の蚊帳の外だった神楽ちゃんが突然僕と京の手を掴み立ち止まった。

「神楽ちゃん？」

神楽ちゃんは道路のある場所を見つめている。

ある場所……電気が切れかけ点滅している街灯と自販機がある場所。

「おい櫛。今……変なの見えなかったか？」

京も神楽ちゃんと同じ方を見たまま、僕に声をかける。

「変なもの？何かあるの？」

未だ二人は一点を見つめたまま固まっている。

僕もそちらを見る。

「街灯と自販機だね」

何の変哲もない自販機と、点滅する街灯がそこにはある。

再び二人に目を向けてみる。

「影が……揺れ……人……形……に……」

京は言葉を絞り出すように喋る。

「人？見間違いじゃ……ない……の？」

もう一度振り返って見る。

僕も見ってしまった。

影が……点滅する街灯の光に照らされた自販機の影が、水の波紋の
ように揺れる。

影が揺れる。

揺れて歪む。

歪んで捻れる。

揺れて歪んで捻れた影が隆起して人影を形作った。

その影が点滅する街灯に一瞬だけ照らされた。

夢で見た狼男だった。

12：帰路（後書き）

大して書いてないのにストックが尽きそうです。

13：軽口（前書き）

ぶつ切りの文章で細やかな表現は難しいです。

13：軽口

神楽ちゃんが立ち止まる瞬間、おかしなものを見た。

自販機の影が揺れたのだ。

揺れた影は膨らむと人の形になった。

人……いや、口の形は人のそれではなく肉食獣のものだ。

狼男。

これが率直な感想だ。

いくらなんでも俺の守備範囲外だ。

あの影が『旨い飲み屋を教えてくれ』って言えば教えられるが、さすがに無理がある。

あー…………。

ホントならこの後家に帰って可愛い妹と一緒にWIIをして風呂入ってから漫画を読んで心地良く床について明日は何があるかなと考えつつ目を閉じると同時に羊の数を数えて羊と山羊の違いは角と毛以外ないのかと思いながら俺には関係無いと結論付けたら何時の間にか朝になって妹を学校の近くまで送ってからUターンで家に帰り新聞を広げつつコーヒー飲みながら今日の運勢に一喜一憂してから家を飛び出して学校に直行して講義で寝て気付いたら飲み屋にいたりバイトに精を出しながら大暴れして精魂尽き果てボロボロで帰宅して風呂上がりにコーヒー牛乳飲んだらパックに妹の名前が書いてあったから慌ててコンビニまで走って馴染みの店員と暫くダベって帰ったら家が施錠されて家なき子で密の部屋まで行って買ったコーヒー牛乳を神楽ちゃんに渡して変な目で見られ――

大きな金属音で意識が戻る。

気がつくと隣に居たはずの神楽ちゃんが密の一步前に出て、掌を狼男に向けて翳している。

神楽ちゃんの足下には動物の――狼男の――毛が煙を出しながら落ちて
ちている。

「……神楽ちゃん？」

呼び掛けても反応は無く、狼男に向けて手を翳したままだ。

「見いつけたあ」

狼男が喋った！

てか動物が喋るのかよ！？
おかし……。

狼（動物）＋男（人間）＝狼男

人間。よって奴は喋る！

よおおしっつ！納得ううっ！！！！

目で見た現実を受け入れるのが俺のポリシー。

で、気持ちを入れ替える。

「かか神楽ちゃん、ああちららのか方はおお知り合いかな？」

やべ、気持ちを入れ替えた筈なのにかなりブルッてる。

神楽ちゃんは無言で頷く。

だが、知り合いとはいっても明らかに友達の間合いは無い。

密を見ると狼男に目を合わせたまま固まっている。

顔が真っ青。

きっと俺も真っ青なるだろうな。

「見つけたと思ったらあ、そんなカスの近くに居たのかあ」

何ていうか……非常に勘に障る喋り方だ。

皮肉ってやりたいが生憎声が出せない。

「おいガキ、こっちの空気はどうよ？」

神楽ちゃんは黙ったままだ。

「すんげえ旨えだあ……ろつつ？」

そう言いながら狼男は自らの体毛を筆り、投げつけてきた。

投げられた瞬間、柔らかな体毛が針のようになり神楽ちゃんに向かって飛んできた。

しかし、体毛の針は神楽ちゃんに当たる直前に掌を中心に広がった何かによって金属音を響かせながら弾かれた……ように見えた。

再び神楽ちゃんの下に体毛が落ちる。

…………… 怖えええ!!!

どこの鬼。郎だよ！

「やっぱり二回防いだってことはガキでもこれ位は防ぐかぁ。流石だなあ？」

笑ってる。

明らかに神楽ちゃんを馬鹿にしてやがる。

神楽ちゃん相変わらずシカト。

俺がムカムカしてきた。

俺ってば単純。

神楽ちゃんが無反応で、退屈なのかターゲットを俺にしてきた。

「……で、手前えは誰だ？」

狼男が俺を指差した。

「向こうじゃ知らねえぞ。見たことねえ顔だ」

突然話を振られて焦る。

向こうつてどちら？

てか、脇とか背中が汗でびっしょりなのに、口の中がカラカラ。

喋れない。

「んん？手前えビビって喋れねえのか！？」

否定できない。

「気にすんな。当然だよなあ、こんなの見ちゃあ。だが、逃げてもいいぜえ。……逃げれるならなあっ!!」

そう言う俺に大きく飛び上がると、俺に飛びかかってきた。

瞬間、とっさに前転して避け、避けた勢いのまま狼男に向き直る。

俺が居た場所は小さなクレーターができ、中心には狼男が立っていた。

……俺天才！俺の本能スゲエ！！

今の回避で心に余裕がでて少しなら喋れそうだ。

「ぎ、ざまあねえな。避けてやったぜ？」

「ハハッ！偶然……だろ？」

狼男は口の端を吊り上げながら笑った。

まるで楽しく遊んでいるかのように笑ったように見えた。

そう思うと俺の気が楽になった。

それなら……。

「どうだか」

笑いながら言っただけだ。

こっちとしても思いつきり笑ってやろうじゃないか。

……怖いけど。

「……気に入ったぜえ、このクソガキイ」

何故か気に入られた。

13：軽口（後書き）

マトモな表現力と語彙力がほしいです。

14：契機（前書き）

短いです。

14：契機

僕は動けなかった。

曲がりなりにも僕の娘である神楽ちゃんが危険に晒されているにも関わらず。

当の神楽ちゃんは僕らの前に出て……僕たちを守っている。

京は奴——狼男——の攻撃を回避した上に、軽口まで言っていたというのに。

歯痒い。

口惜しい。

みっともない。

せめて、皮肉の一つでも言ってやれたら……。

せめて、神楽ちゃんを守り、敵を退ける力があれば。

でも、僕にそんな力は無い。

今までこんな事は経験したことすらない。

でも守りたい。

何も出来ないくせに言うのはワガママかもしれない。

でも、力がほしい。

自分の弱さを確信した今だからこそ思える。

絶対的な力じゃなくていい。

今だけは、神楽ちゃんと京だけでも守れる力がほしい。

今……君の思いに答えよう。

14：契機（後書き）

ご都合主義は大好きです。

燃える展開なら尚更。

15：別人（前書き）

話に感情の起伏が無いです。

15：別人

柊が空を見上げた。

風が吹き……いや、風が柊を中心に渦巻き、何かが集まっていくのが分かる。

近くのゴミ箱が倒れ、電線が激しく唸る。

街灯は紫電を放出しながら激しく明滅を繰り返す。

空気が震えて地面が揺れる。

俺はこんな事は体験したことがない。

地面が震える瞬間を体験した事がない。

そして、柊が震える。

[illegible]

こいつは誰だ？

密じゃない。

櫛の姿をした誰かだ。

体が震えた。

理性では密と分かっているけど、本能は「コイツは密ではない」と叫

んでいる。

そして全てが収まる。

「ははは………ふう……。久しぶりだね、表に出られるのは「

誰だ？

見掛けと気の抜けた声は密だが、雰囲気がるでちがう。

「ありがとう京。君のおかげで時間が稼げたよ」

何というか尊大な物言い。

「……テメエは誰だ？」

言葉を絞り出す。

「ん？僕は密だよ？」

嘘だ。

もしホントだったら後で謝ればいい。

「……その口でもう一度密の名前を語ったらぶん殴るぞ」
「コラ」

即座に否定してやる。

強気で言っても、俺は片膝を地面につけた体勢。

格好悪い。

でも、膝が大爆笑で立てないんだな、これが。

「……いやはや手厳しいね。流石は僕の友達だ」

肩を竦めながら『やれやれ』といった表情をする密。

密は、身構えた狼男を一瞥すると、神楽ちゃんと向かいあって悠然と立つ。

「神楽、久しぶりだね」

頭を撫でる。

神楽ちゃんは目に涙を浮かべながらも笑う。

「苦劳かけたね。もう大丈夫だ。……ミーちゃんの傍に居てやってくれないか？」

……密に『ミーちゃん』て言われた。

神楽ちゃんが俺のすぐ傍に来るのを見届けつつ、狼男を遮るように俺と神楽ちゃんの前に立った。

そして、狼男に向き直る。

「……さて、狼男くん。嘗ての続きをしようじゃないか」

そこからは、次元が違った。

密が狼男を圧倒していたのだ。

先程まで青い顔をしていたのが嘘なほど躍動的に踊り、狼男を翻弄する。

狼男は密について行くので精一杯のようだ。

「くっ！手前えは自らを生贄として差し出したはずだぁ！何故ここまで動けるう！？」

狼男が叫ぶ。

密は飄々と答える。

「拘束は体のみ。魂まで喰われるほど落ちぶれてはおらんよっ」

櫛の左手と狼男の右手が交差する瞬間、狼男の右腕に手を翳す。

狼男の右腕が落ちる。

断面は刃物で両断されたように滑らかなものだ。

切断面がグロい。吐きそう。

右腕は路上を転がり、意思があるように暫く跳ね回る。

狼男の血液が辺り一面に飛び散る。

「ぐうっ！手前えっ！なんでそんな力を隠してやがったあ！？」

荒れ狂い叫ぶ狼男。

「隠す？はて？何のことやら？」

対して密は冷静そのもの。

余裕綽々……といった様子だ。

狼男は後ろに跳び、密から距離をとる。

右腕からは狼男の心臓の鼓動に合わせて血が流れる。

「ちいっ！予想外だぜえ。ここまで出来るとはなあ！」

右腕を押さえながら悪態をつく。

「侮ると足下を掬われるよ？……あ、もう京に掬われてるかな？」

密は狼男を笑う。

……やらしい性格だな。

こんな奴の子どもで、よく神楽ちゃんは素直に育ったものだ。

「ほざけえ、死に損ないがあ！」

「それはお互い様さ」

『口八丁』

今の櫓のためにある言葉だな。

狼男は櫓の余裕そうな態度にたじろぐ。そして呟く。

「仕方ねえ……、喚ぶか……」

僅かの間、目を閉じて……開く。

そして、意を決したように、

「……我が右腕を贅として眷属を此岸に喚び寄せるっ！」

叫ぶ。

すると、その声に応えるように、切り落とされた狼男の右腕が地面から跳ね上がる。

そして、空中で静止。

霧散。

その場で黒い霧が竜巻のように渦巻く。

丈約二メートル。

黒い霧が人の形に構成される。

うう……目が回る。また吐きそう。

竜巻が収まると、そこに毛皮のコートを羽織った男が現れた。

……趣味ワリイな。このご時世に毛皮のコートかよ。

「……………ここはどこだ？」

男が俺たちと狼男、周りの景色を見てから疑問を呈す。

神楽ちゃんは男の視線にたじろぎ、俺の腕を掴んだ。

震えている。

俺も言わずもがな。

「そつ、そのガキと野郎が我らの怨敵だあ！」

狼男がこちらを左手で指差しながら叫ぶ。

……一氣に小物臭くなったな。

そう言われた毛皮コートの男はこちらを見て、興味が無さそうに溜息をつく。

男はコートのポケットから煙草を取り出し、馴れた手つきで火を点けて一服。

狼男の元へ歩き出す。

「おい、貴様が私を喚んだのか？」

「そつ、そうだ！あの野郎お、力を隠してやがったあ！！手前えの力を借りてえ！」

「……………そうか」

そう言つと毛皮コートの男は右手で持っていた煙草を銜え、右手を空にゆらりと上げて、

振り下ろした。

「ああ？」

狼男の声。

狼男の右肩から左腰に線が走る。

切断。

上半身が地に落ち、遅れて下半身が倒れた。

狼男の血がどろどろ流れ、広がっていく。

「ふん……、気に入らんな」

……。普通、腕を振っただけで体を切断する事って可能なのかよ、才
イ。

あ、さっきから吐きそう吐きそうって思ってたけど、とうとう吐いた。

15：別人（後書き）

話の内容の割に感情の起伏が無いですね。

読んで下さってる方はいるのでしょうか？

16：昏倒（前書き）

前話の前書きと後書きに同じことを書いてましたね。

16：昏倒

ウルヴヘジン

彼はそう名乗った。

自分の名前ではないらしい。

なんでも『神の尖兵たる私には敵に名乗る名前など無い』そうだ。

その気構えは兵士ではなく、さながら騎士に相応しい。

「あ……アンタは人間か？」

京が口を開く。

「……姿が同じだけで同族と判断するのは早計というものだ。……」
つ問おう。貴様は何を以て私を同族と呼ぶ？」

「……分からねえから聞いてるんだろうが」

京の言葉に目を細め、口元は緩んでいる。

何やら嬉しいようだ。

「ところで、お仲間を斬っちゃったけど、良かったの？」

彼に質問を投げかける。

「ふん、自らの手に負えないからと他人に尻拭いをさせる輩など、生かしても後に足を引っ張られるだけだ」

手厳しいね。

「でも……喚ばれたなら仲間なんだろうが」

京が言う。

「……ああ。だが、あのような誇りの無い者など最早仲間ではない」

確固たる意志。

「ふん、そうかよ」

京は釈然としない様子だったが、否定も出来ないようで、苦々しく吐き捨てる。

対して彼は京との会話を楽しんでいるようだ。

すると、彼は僕に顔を向けて睨んでくる。
漸く始める気になったかな？

「さて、始めるかい？」

「……いや、今回はそのつもりは無い」

意外だね。てつきり『いざ尋常に勝負』と言ってきそつだったのに。

僕がキョトンとしていると、彼が言葉を続ける。

「これは其れの戦い。今、私に戦う道理は無い」

事切れた狼男を見ながら言う。

「……僕たちを狙ってるんだよね？」

「後ろの二人を守りながらでは満足に動けまい。そこを一方的に…
というのは私の矜持に反する」

あら、お見通しなのね。

彼の気遣いに苦笑する。

「……良い仲間がいるようだな。震えているが、臆しても逃げ出さ
うとしない。立派な男だ」

本当に彼は……京は凄い奴だよ。自信を持って言える。

彼は吸い終えた煙草を狼男の屍に向かって放る。

煙草の火が血を吸って音を立てて消える。

「相対していなければ貴様らとは良き友となれたであろうに……」

「どうだか」

京の台詞を拝借する。

確かに、争っていないければ友達になれたかもしれない。

だけど、そんなifを持ち出す気は更々無い。

ifの時点でどう足掻いても到達できない可能性なのだから。

ifは希望を齎すが、同時に絶望も齎す。

過ぎてしまった選択の分岐点程、心を乱し、羨望し、失望を齎す物はない。

もしifが実現可能なら、自らの体を差し出さずに済む方法を模索、実現させただろう。

しかし、それは過去を省みる事を引き換えにしてしまうのだろうか。

……詮無い話だね。

「……また遭おう、優しき者よ。次は無いと思え、我らの怨敵よ」

そう言うのと突如、消えたはずの煙草の火が再び点り、狼男の屍をも巻き込みながら燃え上がった。

黒い炎。

彼は炎に向かって歩きだす。

黒い炎の中まで歩く。

本来なら炎に焼かれるはずの彼は悠然と立っている。

その体が全て黒い炎に飲み込まれた瞬間、炎は彼と狼男の屍ごとかき消えてしまった。

そこには何も残っておらず、道路一面には散った血液と狼男が作っ

た小さなクレーターのみが残った。

緊張が解けたのか京は道路に仰向けに倒れ、同じく神楽は腰が抜けたのか座り込んでしまった。

「し、死ぬかと思った」

神楽も同意しながらも、京の様子を見て苦笑している。

「さて、二人とも。くつろいでいるところ非常に申し訳無いけど…」

「あ？どうした？」

「早くここから離れようか」

そう言いながら一歩踏み出すと同時に、僕は意識を失い倒れてしまった。

16：昏倒（後書き）

15話と16話はお酒が入っている状態で書いたのだから内容が把握しきれません。

お酒飲みながら更新するもんじゃないですね。

17：始末（前書き）

そろそろ花粉症には辛い季節です。

17：始末

倒れやがった……。

俺、まだ体が震えてるだぜ？

歩こうとしても、さながら生まれたての小鹿みたいなさ。
足がプルプルして覚束無い。

それなのに密を背負ってる俺って凄くね？

「くそぉ、こんな場所でぶっ倒れやがって……」

もう牛歩だよ。ゆっくりゆっくり、一歩一歩着実に。

「あー、感謝すべきかせざるべきか」

非常に微妙な気分だ。
神楽ちゃんも微妙そうな表情だ。

密のおかげで首は繋がった訳だが結局密を背負いながら帰路につく有り様。

俺はともかく、神楽ちゃんは『父親』の密と会えたというのい当人はぶっ倒れる始末。

可哀想すぎる。

まあ、寝てる本人には何も言えない訳だから気にしても意味がないか。

密の部屋に着いたてからはもう大変。

密はそのままベッドに寝かせ、俺は落ち着いて風呂に入るべく勝手に湯を溜めてたら、狼男の死体のグロさを思い出してトイレで土下座。

マーライオン。

湯が溜まる頃には風呂に入る気も失せ、床でゴロ寝。

気付いたら朝。

学校へ行く気分になれる訳もなく、既に起きていた神楽ちゃんに帰ることを伝え、櫛には置き手紙を残して帰宅。

神楽ちゃんは戸口まで俺を見送ってくれた。

去り際の俺の手を神楽ちゃんが握る

目を向けると、神楽ちゃんは申し訳なさそうな顔をしていた。

ああ、そんな顔すんなよ。そんな顔していると櫛に心配されるぞ？

苦笑しつつ、櫛に倅い笑いながら頭を撫でる。

神楽ちゃんが僅かに笑う。

そして、俺に深くお辞儀をしてきた。

俺はすぐにお辞儀を止めさせる。

また頭を撫でて、手を振りその場を後にする。

家に帰ったら、丁度妹の登校時間で、フラフラしながら妹を学校まで送り、また帰宅。

そういえば神楽ちゃんって今日学校行かないのかな？

……さすがに今日は行かないか。二日連続休み？

風呂にも入らず寝る。

夕方に起きて風呂に入る。

メール・・・密3件、他14件
着歴・・・密32件、他6件

メールと着歴がビックリなことに。

以上、ダイジェスト。

密以外のメールと電話は知り合いとバイトの連絡なのでひとまず保留。

密は……電話で済ませるつもりは無いから直接部屋へ行くことにする。

道すがら今では珍しい駄菓子屋でお菓子とジュースを購入。

ささやかな土産。

で、密の部屋に行ったわけだが……。

「よお………って、どうした？そんな今にも自殺しそうな顔して？」

そこにはいかにも『拳動不審』といった様子の部屋の主が居た。

「京！神楽ちゃんが居ない！」

挨拶無しに開口一番、詰め寄ってきた。

雰囲気からして狼男と暴れてた密ではなく、俺がよく知る密のよう
だ。

「はあ？どういうことだよ！？」

「それは僕が知りたいよ！」

「朝、俺が帰った時にはまだ居たぞ？」

まずは軽く説明をする。

普通に考えれば俺が帰ってから櫛が起きるまでに消えたことになる。

「んー、立ち話もアレだ。まずは部屋に入れろ」

ずかずかと部屋に入る。

床に座り、ジュースの蓋を開ける。

「ほい、櫛も飲むか？」

缶ジュースを一本差し出す。

「そんな落ち着いてる場合じゃないんだよ!」

そりゃそうだわ。

「……で、探しに行くか?」

ジュースと買ってきたお菓子が入った袋ををテーブルに置きながら
尋ねる。

「……どこへ?」

まだ混乱しているようだ。

「オイ、しっかりしろよ親父」

「……っ!……ああーイライラするっ!」

やべ、密が壊れ始めた。

神楽ちゃんを心配するのはわかるけど、昨日の今日で独り外出するってことは、それなりに安全ってアタリでもつけてるんでないのかね？

ジュースを半分ほど飲んだところで切り出す。

「昨日の場所じゃないか？」

「よし、行こう！」

決断早いな。

でも、丁度いいか。

俺も神楽ちゃんに会いたいからな。
聞きたいこともあるし。

17：始末（後書き）

書きたいネタがあっても上手に書ける技術が無いです。

18：哀悼（前書き）

勢いだけで書きました。

18：哀悼

昨日狼男が現れた場所に行くと、そこには神楽ちゃんがいた。

神楽ちゃんは狼男が倒れた場所で、しゃがんだ体勢で目を閉じて手を合わせていた。

「……」

「……」

その光景を黙って京と見守る。

神楽ちゃんのその姿はとても綺麗で、とても清廉で、思わず目を奪われてしまった。

しばらく見ていると、神楽ちゃんの涙が頬を濡らした。

優しいんだろう。

襲われたというのに、狼男のために心を痛めるなんて。

とてもじゃないが僕にはできない。京を横目でみると、彼もばつが悪そうに目をそらしていた。

しばらくすると神楽ちゃんは僕たちに気付いようで、慌てて涙を拭うときこちない笑顔で近づき、僕に抱きついてきた。

少し腫れた目元を隠すように。

暫く好きなようにさせていたが、対応に困り京を再び見ると、先程の神楽ちゃんと同様に手を合わせていた。

意外だった。

さっきは嫌そうな顔してたのに拝むとは。

京ならあんな目にあっただから唾でも吐き捨てるかと思ったけど、
そうではないようだ。

「……………京？」

「……………どうした？」

京らしくない真面目な顔で僕を見つめる。

……………未だに境田京という人物像を掴めない。

真面目不真面目破天荒軽薄慇懃無礼気紛れ……………今までいろんな顔を
見てきたつもりだけど、どれも本当でどれも嘘のように見える。

でも、知ってる。京はとても優しくて甘くて時に苛烈。

以前、学校の講義で『自分をお菓子に例える』というものがあった。

そこで京は自分のことを『コーラ』と評した。

曰く『冷たくて甘くて皆に愛されてる』だそうだ。

巧いこと言っただけだけど痛々しかったのを覚えてる。

でも、それが全てでないのは想像がつく。

『冷たくて甘くて皆に愛されて歯に悪い』

本当ならこう言いそうなものだ。あくまでも予想だけど。

とにかく、嘘はついてないだろうが本当を全ては明かしてないのだ

ろっ。

そのあたりはプライバシーってものかな。

『ちなみに俺としては密はスルメだな』

曰く『噛むほどに味がでる』

何のこっちゃ。

お菓子ですらない。

閑話休題。

「……いや、手を合わせてたから……」

「ああ……。皮肉だろうが、一応気に入ったって言われたからな」

なんというか律儀だ。やっぱいい奴なんだね。

「へえ……」

京は『俺は大つつ嫌いだけどな』と続けた。

凄く嫌そうな表情。

思わず苦笑してしまう。

「……なんだよ、急に笑いやがって」

『何でもないよ』とだけ返すが、京は納得してないようだ。

頭ちゃらんぼらんだと思ってた友人が不思議な優しさを発露させ、襲いかかってきた狼男に対して哀悼の意を示したんだよ？

そんな彼の僅かながらのマトモな人間性を評価しないでどこを評価するのだろうか。

彼の心の成長を祝福しようではないか。

アーメン。

ま、意味ない適当な思考はなおざりに。

「……密、ニヤニヤしていると頭疑われるぞ」

失礼な。

「……さて、神楽ちゃんも見つかつたし、帰ろつか？」

神楽ちゃんと手をつなぎ、京に先行して歩く。

すると、後ろからぽつりと。

「…幼女と手をつなぎ、ニヤニヤ歩くその姿は正にロリコンそのものであった」

……よくまあ口がまわるじやうで。

18：哀悼（後書き）

今後の方向性が定まりません。

19：独白（前書き）

内には優しい京さん。

19：独白

「さて、邪魔者もいなくなった」

テレビの電源をいれる。

テレビは芸人が出演する雑学番組だ。

……騒がしい。

密の部屋に帰った後、今日は自炊ということで、俺と神楽ちゃんはお留守番で密に夕飯の買い出しに行かせた。

神楽ちゃんは少し不満そうだ。

「まあ密は神楽ちゃんがまた勝手にどこか行くんじゃないかって心配なんだよ」

神楽ちゃんを宥める。

子どもに気を使う俺、マジでヘタレ。

こんな事なら、密と神楽ちゃんが留守番で俺に行かせれば良かったのになぁ…。

『京が行くと余計な物まで買ってくるのは目に見えてる』

あれえ、不思議な声が聞こえたよお。

「……まあ。そんな顔するなよ。益々密に心配かけるぞ?」

神楽ちゃんに笑いかける。

薄い反応。

そして沈黙。

軽く溜息をつく。

そして神楽ちゃんにテーブルを挟んで向き直る。

「……これから言うことは俺の独り言だ。気にしないでくれ」

神楽ちゃんは俺の発言の意図を掴めないでいるようだ。

でも、それはどうでもいい。

これは俺の自己満足だ。

思った事を言うだけだ。

ただそれだけだ。

「神楽ちゃんが来てから狼男騒ぎ」

「あの時、神楽ちゃんは狼男からの攻撃を変な壁で弾いたように見えた」

「甘々な判断で、それだけなら偶然かもしれない」

「けど、狼男と面識がある」

「会話も変な部分があった。狼男が言っていた『向こう』って何だ？そもそも狼男って何だったんだ？」

「神楽ちゃん、君は狼男に襲われた」

「奴の最初の発言から、狙われたのは密や俺じゃなくて、神楽ちゃんを狙ってたように感じた」

「密の言う『夢で父親と言われた』からを二人を親子だと、そのまま受け取る程俺は馬鹿正直じゃない」

「第一、親子にしては年齢がおかしい」

「……………一体君は誰だ？」

神楽ちゃんは黙って俺の独り言に耳を傾けている。

狼狽えず、ただ俺の言葉を正面から受け止めている。

「……………この際、神楽ちゃんが密の娘でも恋人でも何でもいい。
……せめて、密を巻き込まないでくれ」

本音を吐き出す。

アイツはホントにいい奴だ。

そんな密を巻き込んでほしくない。

俺は神楽ちゃんを見つめた。

19：独白（後書き）

人の為に何かをするのは難しいものです。

20：文章（前書き）

いくら事実であっても信憑性が無ければ嘘と相違無いです。

20：文章

神楽ちゃんは黒く深い双眸で俺をじっと見ている。

黒い瞳に吸い込まれる……いや、飲み込まれ沈んでしまいそうな黒い瞳だ。

「……」

「……」

すると神楽ちゃんは、昨日からテーブルに置いたままの自らの名前が書かれているルーズリーフとペンを取り、何か書き始めた。

随分長く書いている。

暇を持て余した俺はテレビを観る。

……。

つまらん。

テレビをしばらく見ていると、文章を書き上げたらしく、ルーズリーフを俺に差し出してきた。

読む。

『先ずは昨夜の騒動について謝罪させていただきます。京さん、申し訳ありませんでした。』

狼男さんの言っていた事から想像がつくとは思いますが、私は此方の世界の人間ではありません。

突然、このような事を伝えても信じられないと思います。でも、本当の事です。

彼方、簡単に表すと異世界・平行世界と捉えていただいても結構です。彼方は可能性の一つを体現した世界です。勿論、此方の世界も

です。

分かれ道を右に進むか、左に進むかの僅かな違いの世界です。

此方の世界は科学が進歩し、私の居た彼方の世界は術式、所謂魔法や魔術が進歩した世界です。

狼男さんは自らの腕を代償として男性を召喚しました。私も同じ様に此方の世界に来ました。

先程、平行世界と表しましたが、あくまでも可能性の分岐の一つです。しかし些細な違いから全てが変わっています。

ただ、人については一概には言えません。

話は変わりますが、人には魂と魄があります。

平行世界に於いては、魄という器が違えど、魂は変わりません。

私は魂を頼りに、お父さんに辿り着きました。あとは、京さんの御存知の通りです。

勿論、肉親ではありませんが、魂の繋がりとしては歴とした親子です。

狼男さんについては、詳細を伝えるには長くなるのですが、簡潔に表すと私たち人間の敵です。

此方の世界では科学が謎を解明するように、彼方の世界では魔法が謎を解明していきました。

魔法が解明したもの、それは人ならざるもの、即ち魔です。

それは程度は違えど些細な害という程度でした。

しかし、解明される度に人々に認識され、明確なものとなり、力を得て、世界に顕現し始めたのです。

魔は人々を脅かし、侵攻を始めました。

私はその侵攻から一時的に此方に匿われるために来ました。期限は48時間。

明日の明け方には此方の世界からは消えてしまいます。

昨夜の様な事はもう無いと思います。よってこれ以上巻き込むことはありません。

巻き込んでしまい大変申し訳ありませんでした』

字が超達筆！

独り言の名を借りた質問に答えた上に随分な大作だな！！

内容は……幻想的で科学的で……、何とまあ。

読み終えた俺が何も言い返せずに暫く神楽ちゃんの顔を黙って見ていると、静寂を破るように櫛が帰ってきた。

櫛、ナイスタイミング！

……さて、飯のために準備を手伝うかな。

飯の準備の間、神楽ちゃんは少し余所余所しかったが、俺から話し掛けると余所余所しさは次第に無くなっていった。

飯を食べた後少しだけ寛ぎ、櫓に帰ることを告げる。

帰り際に、また神楽ちゃんが外まで見送りに来てくれた。
櫓は洗い物をしている。

昨日の別れ際同様に、また神楽ちゃんの頭を撫でる。
髪すんげえ柔らかい。

「じゃあな。暫くは親子水入らずの時間を楽しんでくれ」

軽く茶化してその場を離れる。

数歩進んだ時、不意に

「ありがとうございます」

声が聞こえた。

振り返って見ると、神楽ちゃんは優しく笑っていた。

……初めて聞いたな、神楽ちゃんの声。

「ありがとうございます、京さん」

「……気にするな。俺は何もしてないさ」

「でも……ありがとうございます」

言葉遣い丁寧だな。

「どーいたしました」

気恥ずかしくなりながらも返す。

「感謝の気持ちだけは伝えたかったです……引き留めてしまって
申し訳ありません。では……さようなら、京さん」

「……ああ、またな」

『またな』を強調して答える。

神楽ちゃんは数瞬止まると、すぐに俺の意図を理解したらしく破顔
一笑。

「はいっ！」

「あ……、あと俺の事はミィちゃんって呼んでくれよ。」

俺は笑いながらその場を後にした。

20：文章（後書き）

話半分で後悔するリスクを軽減します。

21：瞑目（前書き）

久しぶりの更新です。

21：瞑目

京は夕飯を思いっきり食い散らかした挙げ句、片付けも手伝わずに帰ってしまった。

神楽ちゃんは片付けを手伝おうとしてくれたけど、父親らしい所を見せたいがために断った。

果たして、本当に父親なのかは不明だけど。

父親確定でも困るんだけどね。

片付けも終わり、テレビを視ていた神楽ちゃんの元へ行く。

……って、時代劇観てるし。

目をキラキラさせながら時代劇で……。

本当に子どもなのかと。

神楽ちゃんを横目に京が床に散らかしたお菓子の包みを片付けていく。

そこでルーズリーフを見つけた。神楽ちゃんが名前を書いた物だろうか。

見ると名前に加えて、何か長い文章が書かれていた。

.....。

思考が止まった。

神楽ちゃんを見る。

変わらずテレビに釘付け。

ルーズリーフに目を落とす。

再び神楽ちゃんを見る。

……これは突っ込むべきなのかな？

「……………か、神楽ちゃん？」

恐る恐る声をかける。

すると、神楽ちゃんはチラッとこちらを見るがすぐにテレビに向き直ってしまった。

「……………あのお……………神楽ちゃん？」

もう一度呼ぶ。

今度はこちらをしっかりと見てくれた。

「これ……………何？」

手に持っていたルーズリーフを見せる。

神楽ちゃんはギョツという擬音がつきそうな位の驚き方をすると僕の手にあるルーズリーフを引ったくった。

顔面蒼白。

……何だか悪いことをしてしまった気分だ。

居た堪れない。

「お……お風呂入ろうか？」

ハイ、この状況から逃げ出した僕はチキンです。

神楽ちゃんがお風呂に入ってる間、頭の中のグルグルとした状態を抑えるのに神経を総動員していた。

狼男が異世界の敵で、神楽ちゃんは異世界からやってきて、魂が親子で……えーっと、平行世界は異世界で、魔法魔術が当たり前で、科学より発達して……。

……。

……。

……。

うん、そういう事なんだよね。

考える事を放棄した。

何だか大切な事を忘れてるような気がするけど、忘れてしまったんだから大したことはないんだろう。

暫く考える事を放棄して頭の中で花畑をスキップしていると、神樂ちゃんがお風呂からあがった。神樂ちゃんと交代で僕もお風呂に入った。

一緒に寝た。

一緒にベッドに入った神樂ちゃんは最初、僕から少し距離を空けて寝ていたけど、身じろぎしながら徐々に近付いてきた。

仕舞いには手を繋ぎ、顔を僕の胸板に押し付けるように埋めて寝るという、どこの恋人だという体制に行き着いた。

……何て言うか……幸せ。

いけない道……もとい父性に目覚めてしまいそうだ。

実際に子供ができれば毎晩こんな気持ちになるのだろうか。

……寝れないよ。

こんなの毎晩続いたら72時間働けますか！？の某財閥社長もビツクリな状態になってしまいそうだ。

取り留めなく悩んでいると、隣からは穏やかな寝息が聞こえてきた。

何時の間にか神楽ちゃんは眠ってしまったようだ。

そして、神楽ちゃんの寝息につられて僕も何時の間にか眠りについてしまった。

21：瞑目（後書き）

年度末から忙しくなり書く時間がしつかりと確保できませんでした。

時間の使い方が下手なのが目下の悩み。

22：転換（前書き）

お久しぶりです。

「…………と、いう夢をみたんだよ」

朝、密の部屋に行くと、朝食を摂っていた密に訳の分からない話をされた。

正直笑い話にもならない。

人の夢の話ほどためにならないものはない。

朝一の話題で昨晚みた夢について話すのはアリかもしれないが、な

んていうか……オチがほしい。

櫛の夢の話は明らかにオチてない。

「なあ、櫛。……起承転結の起すら終わってない話をされても困るんだ」

「まあ夢だし。その辺はいいんじゃない？」

「いやいや。夢見るのは構わねえけど、朝一からそんな話を聞かされた俺はどんなリアクション取ればいいわけ？」

「……せめて『すごいね』と返してほしいところだね」

「彼女じゃねえんだから」

「夢を見て脳が情報を整理出来ても心はそうじゃない。だから夢を話して心を整理してるんだよ」

ファンタジーな夢を整理してどうするんだよ。そんな情報明らかに

「ロリちゃん。」

「情報……とりあえずお前がロリコンなのは分かった」

「違うっての。夢では明らかにパパ目線」

「嫁居ねえ上にやることやらねえで子どもとか、コウノトリが子どもを連れてくる話を片親でやってのけてるんだな」

「むしろキャベツ畑？」

「笑えねえよ」

と、言いつつも笑ってしまった。

「で、櫛さん。今後はどうなると思いますか？」

床に転がっていたテレビリモコンをマイクに見立ててインタビュー。

「ええ、我が娘は天真爛漫に育ち、中学生になるころには芸能事務所から引く手数多、モテモテ街道を爆進ですね、ハイ」

インタビューにわざとらしい口調で応える櫛。やけにノリ良いなコイツ。

「それはスゴイですね！」

「まあ近付いてくる有象無象は斬って捨てますがねっ！」

「ダメなパパの典型例じゃねえか！」

「駄目で結構。軟弱な草ばかり食べてるような人に愛娘は預けられません」

「…明らかに草が主食のお前に言われると無性に腹が立つな」

「子どもできれば京もきつとそうなるよ」

「そんなものかねえ…。それじゃあ俺はそろそろバイト行くよ」

俺はそう言って話を終了させて立ち上がる。

「そう…、ところで何で朝から僕の部屋に来たの？」

「バイトまで暇だったから」

「あ、そう」

「密は？」

「講義があるよ」

「バイトは？」

「休み」

「じゃあ、夜飯食いに行こう」

「了解。部屋に居るからバイト終わったら来……て……ね？」

突然櫛の言葉が途切れ途切れになる。

「どうし………た？」

櫛に顔を向けると俺も気がつく。

床が、特に俺の足元が発光している。

「おい…なんだこりゃ？」

「わ、分からない」

発光は次第に強くなり、紫電が走る。

「つつ！？今、パチッていったぞしかも痛えっ！」

そして、光は俺を包み込んだ。

22：転換（後書き）

次をどうするか悩みます。

23：混乱（前書き）

いろいろありました。

23：混乱

「つつ！今、パチッていったぞしかも痛えっ！」

突然に京の足元が光り出したかと思うと、あっという間に光りは僕の部屋全体を包み込んだ。

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・

「……で、どうなってんの？」

「……僕に言われても」

結論から言つと、どうもなって無かった。

ただ床が光っただけ。

アレじゃないの？

普通は何か超常的な現象が起きたりして、な！何だってー！みたいな事になるものじゃないの？

・・・何かあっても空恐ろしいだけなんだけど。

今ですら突然の事で混乱してるっていうのに。

そして、混乱した僕らは・・・。

「・・・じゃあ、俺バイトあるから行くとするか」

「う、うん。僕はもう一眠りするよ」

色々と逃げに走った。

「オ・・・オイ、講義はどうするんだよ？」

「じ、自主休講するよ」

「ハハハ、この不良めえ」

「イヤイヤ、京さんにはかてませんよぉ」

アハハハ。

ハハハ。

・・・ハア。

「・・・じゃあ飯、夕方な」

「うん・・・」

京が部屋から出ていき、一人になった僕は逃げるようにベッドに飛び込み眠りに着いた。

先程の出来事が夢であるようにと願いながら。

23：混乱（後書き）

次からサブタイトルの形式を変えます。

24：境田京のアルバイト1（前書き）

サブタイトルの形式と文章の書き方を変えてみました。

24：境田京のアルバイト1

目の前にはお世辞にも綺麗とは言い難い5階建てのオフィスビルがあった。

ここの4階に京のバイト先だ。

ビルの中に入ると、入口のエントランスには各階の案内板、申し訳程度に絵画が飾られ、花瓶には鮮やかな花が活けられている。

「嗚呼、超気が重いですよ・・・っと」

京は独り言を言いながらエレベーターに乗り込み、「4」のボタンを押す。

静かに動き出すエレベーター。

エレベーターの低い駆動音が小さく響く。

4階に到着と同時に、低い駆動音が止む。

エレベーターの扉が開く。

目の前にはロビー。

ロビーの受付テーブルには内線電話と『ご用の方は内線04にお掛けください。』と記入された立札がある。

そして、何故か大量に散乱するビールの空き缶とロビーのど真ん中に折り畳み式のパイプベッド。

パイプベッドには長い黒髪を湛えた女性が寝ている。

毛布越しにも分かる均整のとれた体つき。

呼吸で僅かに上下する豊かな胸。

世の女性たちが憧れるであろう細くくびれた腰。

細いながらも綺麗な線を描く腰から臀部にかけてのライン。

「・・・酒臭え」

そして、酒臭さがそれらの女性的魅力を全て台無しにしている。

ニワ ユウキ
丹羽 優希

それが彼女の名前だ。

「優希さん、起きてください。朝ですよ」

肩に手をかけて、軽く体を揺すって起こす。

「んん・・・」

艶のある唇から甘い声が漏れる。

ただし酒臭い。

「起きてください。もう始業の時間は過ぎてますよ?」

もう一度、今度は少し強く体を揺する。

「んあ……ん……。やあ……ミヤーク……おはよう」

瞼を擦りながら、ようやく起こされた事に気付く。
優希はゆっくりと体を起こす。

「おはようございます」

溜息をつきながら挨拶に応える京。

「すごい空き缶の量ツスね。昨日はどの位呑んでたんスか？」

「・・・いやあ、あんま覚えてないや」

と、笑いながら答える優希。

こんなのが大人で、社会に出て働いているのだから世も末だ。

それに問題なく(?)働けているのだから恐ろしい。

・・・こんな大人には成るまい。

京は小さく決意する。

「どうしたのさ?急に黙りこんで」

「・・・いえ、これからの事について考えてたんスよ」

「はあーん。さては私とベッドでニヤンニヤンしたいんだな?」

ニヤニヤしながら優希は話す。

「うんうん、まだ若いからねえ。でも・・・、ミャー」ならいいよ

肩にかかった黒髪を弄り、妖艶に微笑みながら言ってくる。

京はからかわれてるようだ。

京は、ならばと・・・。

「それじゃ遠慮なく」

京は取り敢えず乗ってみることにした。

ベッドに腰を掛け優希の腰に右手を回す。

左手は彼女の顎に添えて、顔をこちらに向けさせる。

この時点で、優希の顔は真っ赤だ。

その反応は京の逆襲を想定していなかったように見受けられた。

「え・・・？い・・・いや、ちよっ！え？・・・ええ！？」

混乱しているようだ。

京は優しく微笑み、じっと目を見つめる。

そのままの状態を維持。

そして、優希がオロオロし、視線をキョロキョロとした所で一言。

「・・・冗談ですよ？」

意地悪そうにニヤツと笑って見せる。

キョトンとする優希。

「遊ぶなら体張って最低これ位しなきゃダメっスよ？」

「う・・・」

「さあ！とつと顔を洗ってきてください！」

ベッドから立ち上がり優希さんの肩を軽く叩く。

「・・・ばか」

優希は俯いて、京にソップを向いた。

京は笑いながら、各々に与えられた机があるオフィスルームへ歩みを進めていった。

24：境田京のアルバイト1（後書き）

『境田京のアルバイト』はこの形式で書いてみたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6953j/>

獏と溜息と小言と

2011年10月6日17時25分発行